

芥川だより

発行日 ***2015年11月1日 e-mail:akutagawa_dayori@yahoo.co.jp
最新号から創刊号まで閲覧できます。 http://akutagawadayori.sakura.ne.jp/

編集発行人 下村嘉明

発行所

☆ 着物から服へ

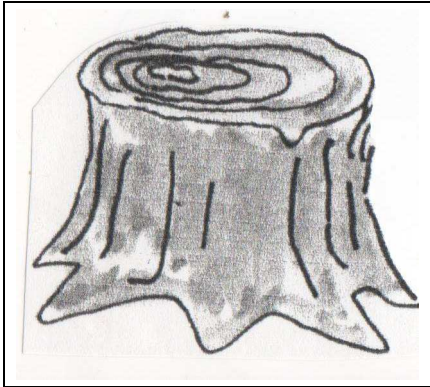
着物から服を仕立てます

高槻市芥川町2 - 1 4 - 3

TEL 072 - 681 - 8870

***** 一部50円です *****

松の切り株



宝塚駅から浅瀬になっている武庫川に架かる宝来橋を渡り住宅街の坂道を登ると、塩尾寺に続く曲がりくねった道にでる。一般道をさけて急な脇道を一気に登ると尾根筋に通じている。私はこのルートの静けさと明るさに魅かれて好んで歩くのである。ちょうど駅から一時間、急登を登りきると開けた場所になる。私は松の切株に会う為にこの場所で一息入れる。

そこに身の丈ほどの丸太が座るのに格好のあんばいで地べたに放置されている。丸太の横に80年程の樹齢の大きな松の切株はある。株は地面から60cmほど残して電動ノコギリで切られた様子でトゲのような木片をつき出した切り口が痛々しい。たぶんマツクイ虫にやられ切らざるを得なかったのだろう。

雑木におおわれている為に夕暮れの光も届かない尾根にあって光がさすのは晴れの日々の早朝だけであるが、その早朝の朝日を浴びると切株は黄金色に輝く。まるで神々しい建物でもあるかのように。今にも朽ち果てようとしているのを忘れさす存在感がある。絶えざる雨風や冬の風雪にも耐え続け枯れ果てようとしているが、まだ木の魂は確かに残っている。いろんな試練が木の命を削らせ朽ちていくとも、なお魂を宿らせ朝日に毅然と対峙している切り株を見ていると妙に共感をおぼえる。歳のせい、病を患った為か、心を動かされる。

凍った雪を頭にのせている冬の時も、日照りで乾ききった姿の時も。雨ふりの日、気持ちよさそうに雨に洗われている時も。新緑の季節、木々がまぶし過ぎるなか、枯れた株がひっそりとたたずんでいる時も。切り株は何も言わない。ただそこで生きている。想い半ばで切られアリに喰われながらも黙って座り続ける株は、無言で私に語りかけてくるのである。私はその切り株の在り方に己の心を映してしまふ。そして語らない切り株に教えられるのはいつも「でんと生きろ」「静かに座っている」だ。

私は、休日の日、その切り株に会うために始発に乗って宝塚へ行く。

死をめぐるあれやこれ(15)

石川 吾郎

火の祭り

「今夜、すごい祭りがあるらしい。一緒に見に行かないか？」と、友人に誘われたのは、学生時代、間近かに迫った学園祭の準備をしていた仲間とラーメン屋に入ったときだった。それは面白そうだったということで、ラーメンも早々に出町柳から叡山電車に乗り込んだ、というのが私の「鞍馬の火祭り」との出会いだった。◆山間の谷沿いの街道に松明の数がだんだん増えてゆき、御神酒で男たちに勢いがついてくると、山門前の石段に大松明が集まってくる。そして松明を立てると、辺りは炎の渦となる。谷間が炎に包まれると言われる通りになる。◆男たちはそのまわりで「サイレヤ、サイリョウ」の掛け声をさげ、その声はさらに大きくなって、まわりの山の深い闇へと吸い込まれていく。祭りの男たちは、ほとんど陶酔状態のように見える。そして見物人たちも、その陶酔の中に巻き込まれていく。その興奮状態が高まった九時ごろ、いよいよ神輿が出て祭りの最高潮となる。◆「チョッペイ」という行事がある。今年成人を迎えた若者が、神輿が出て行くときそのかっぎ棒の前にかつぎ上げられ、衆人の前で大股を開くというものだ。これは成人になったということ、を村人にお披露目をする、一種の通過儀礼であるということだ。◆大松明の火は、人のこころに野性の火を灯し、生と性と死を照らし出す。

巻頭エッセイ	下村嘉明	1
巻頭コラム	石川吾郎	1
「TPP大筋合意」とマスコミ報道	伊藤明	2
素老人☆よもだ帳	坂本一光	6
憲法は民衆を守ってくれる宝	下村嘉明	8
新自由主義の哲学、それはどこから来たのか	祖蔵哲	9
闘病記	下村嘉明	11
おっちょこチョイぼけ	A O	12
世界一周旅行記	若山哲郎	13
大人の今昔物語	石川吾郎	14
サラリーマン渡世譚	明石幸次郎	15
言葉が熟するということ	大江雅晃	16
編集後記	嘉	17
女90年の軌跡	眞樫	18
俳句	土田裕	18

みんなで知ろう日本の危機 (5)

「TPP大筋合意」とマスコミ報道

伊藤 明

はじめに

最近のマスコミの劣化には甚だしいものがあります。安保法制が国会で不当に強行採決された直後から、マスコミはそろって国民の関心を他にそらし、国民にこのことを忘れさせようとするかのよう

これまで私は、この記事の中でTPPの危険性について多々述べてきましたが、今回は「TPP交渉の大筋合意」という報道が十月はじめに流されて以降のマスコミ報道の歪み・偏向ぶりについて考えてみます。最近のTPPマスコミ報道の多くが、工業製品と農作物などの関税の問題に限られたものでした。この報道のあり方の背後に安倍政権の圧力と、それに応える報道各社の自己規制が存在することを感ぜざるをえませんでした。ただ数少ない例外もありましたので、それについても紹介することにします。

TPP交渉の「大筋合意」という発表のカラクリ

十月五日に「TPP交渉の大筋合意」というニュースが飛び込んできました。マスコミはこれについて大々的な報道合戦を繰り広げました。報道されるのは政府の発表そのままの内容でした。テレビの情報番組では、農産物の値段がどれくらい下がるのかといったことばかりで占められていました。さらに十月二十日にTPPの「大筋合意」の概要なるものが明らかにされました。

この報道は、この記事の中でTPPの危険性について多々述べてきましたが、今回は「TPP交渉の大筋合意」という報道が十月はじめに流されて以降のマスコミ報道の歪み・偏向ぶりについて考えてみます。最近のTPPマスコミ報道の多くが、工業製品と農作物などの関税の問題に限られたものでした。この報道のあり方の背後に安倍政権の圧力と、それに応える報道各社の自己規制が存在することを感ぜざるをえませんでした。ただ数少ない例外もありましたので、それについても紹介することにします。

と工業製品の関税の分野に限った発表であり、TPPにはその他、金融や投資の規制撤廃などといった重要項目が存在しているのですが、それはまだ発表されていないのです。TPPの本当の姿はまだヴェールの中に隠されたままです。このことについて、新聞やテレビニュースは触れることがほとんどありません。

政府発表がなされた中で、市場開放分野では全品目の九十五%で関税を最終的に撤廃。これは過去に締結したどの協定よりも高い割合です。国会決議が交渉対象にしないよう求めた農産物重要五項目(コメ、麦、牛・豚肉、乳製品、砂糖)でも、五八六品目のうち一七四品目、約三〇%で関税を撤廃されることになった

現在でさえ日本の食料の自給率は三〇%あまりと言われていますが、TPPがこのまま締結されてしまうと、日本の畜産業は確実に滅ぼされ、その他の農業も大きな打撃を受けることになります。日本から水田や畑がますます減少し国土が荒廃することは容易に想像できます。食料自給率は今以上に低下し国民の食料は海外に頼らなければならなくなります。「食料安全保障」という点からみてこれは深刻な事態です。たとえば輸入先の国が天候不順などで穀物がとれなくなると、たちまちわが国の食料供給が困難になってしまう事態となります。(実際に過去には、オーストラリアの干ばつで小麦の供給が困難になってしまったことがありますが) 大げさでなく国民が飢えてしまうという事態もありうるということです。ところが食品の関税が撤廃されて輸入食品がどれほど安くなるか、といったことに焦点をあてるばかりのニュースが大部分。関税分野に限った場合だけでも、日本の農業・酪農、それに「食料安全保障」にTPPがもたらす危機を正面から取り上げた報道は少数でした。

さらにこれほど日本という国家の形に大きな影響を及ぼす条約の交渉が、その内容を全く秘密のうちにいうという民主主義に反した秘密主義に対して、マスコミは基本的な批判を全くしていません。「国民のため」になる交渉ならばこそこそと隠しごとをする必要は何もないはず。それをひた隠しにするには、民主主義に反し、国民の大多数の利益に反した内容があるからに他ならないでしょう。TPPのもっとも重要な内容は、金融や投資における規制の撤廃などといった、ルール分野、日本社会の構造そのものに向けられているのです。これらは一般的には目に見えにくいものですが、国民皆保険を破壊し、外国資本が我々の貯蓄をかすめとるなどといった深刻な影響を今後の日本に与え、社会そのものの形を変えていくものです。

欧州でもTPPに似た環大西洋貿易投資。パートナーシップ(TTIP)の交渉が進められ、それに対して反対する二十五万人規模のデモが十月十日にベルリンで行われたとの報道がありました。日本でもまだこれほど大規模なデモは実現していません。交渉が秘密主義であることは

同じようですが、このように反対運動が盛り上がる大きな原因の一つはマスコミ報道の姿勢にあるのではないかと思われまます。ドイツをはじめとする欧州先進各国のジャーナリズムは、日本よりも健全な政府批判を繰り返していると考えられます。

TPPはまだ成立すると決まったわけではない

このところのテレビ番組でTPPがすでに決まったかのように誤解させる報道がされているのですが、実際にはTPPは決着したわけではありません。今後まだ協定文書の作成・調印、各国の批准、国会の承認という段階があるのです。その事情をテレビニュースなどでは伝えることをせず、「もう決まっちゃった、しかたがない」といったあきらめの雰囲気や国民の間に醸し出そうとしています。特にNHKはそれに力を注いでいるように見えます。

実はまだ明らかにされない情報の中には、ISD条項やラチェット条項などといったものがあり、こういったものがTPPの核心部分で、国としての主権を放棄するような不公平なものなのです。

TPPの真の姿とは

TPPは二つの顔があると言われていきます。物品関税の原則撤廃という側面と、国内の投資（これは主に規制を撤廃という形をとる）という側面です。しかもこれすべてではありません。ISD条項

やラチェット条項は国内法の上に来て、

国民を守るための各種の規制が強制的に取り外され、後戻りできなくされるといふ、屈辱的かつ反国民的な内容で、国民が聞けば必ず怒り心頭になるような驚くべき内容を政府はまだ隠しています。

ISD条項とは、投資家保護条項とも言われるもので、投資家が「不利益を被った」と認識すればその損害について投資先国政府に対し賠償を求める事ができる。「公共の利益」は考慮されず「投資家の被害がどれ程か」と言う観点からのみ審議されるもの。この裁判は圧倒的にアメリカに有利な条件で行われ、百分アメリカが勝訴する実績をもっています。

ラチェット条項とは、この条項は、国が自国の産業を守る為、外資を規制する等が出来なくなる仕組みで、いったん規制が撤廃されると、再び法律で規制することを禁止するもの。あともしできない仕組みなのです（これらについては本紙一〇三号の記事を読んでください。また後で紹介する動画も見てください）。

この二つの条項によって、にわかに信じられないことですが、国内の制度や規制を外国資本が文句をつけて訴え、強制的に変えさせることが可能になってしまふのです。この条項は国内法の上に来て国内の法律を強制的に変更させる力をもっており、わが国の独立性を侵害するものです。**明治初期の開国時に締結した不平等条約なみだ**という表現もあながちウソではないのです。国民が知れば必ず拒否する内容なのです。この追及を逃れる

ために、安倍政権は憲法規定に基づいた野党の臨時国会開催要求を無視しています。

外国人投資家の言うままの政策をする約束

また一部発表された中には、次のような信じられない内容が書かれていることが判明しています。米国のTPP二国協議の確認事項には、「規制改革会議の中に、外国人投資家の意見を取り入れることが明記にされているのです。『規制改革会議』というのは、内閣に設置された審議会で、総理大臣の諮問を受け意見を出すとこの委員は内閣が指名し、安倍政権ではこの審議会の意見にそった政策を執行していきます。問題はここに外国人の投資家の意見を取り入れることを約束してしまっている。つまり日本の政策、とくに各種の制度や規制が、外国投資家の都合によって撤廃されるということ約束する、といった驚くべきものなのです。これも国家としての主権侵害をきたす可能性が大きく、重大な問題となります。

マスコミ報道と政府の戦略

そもそも「大筋合意」という聞き慣れない表現自体が、まやかしの、「合意したした詐欺」とでもいえるものです。これは文字通り「完全合意」は決定的に違うもの。アトランタでの交渉で時間切れとなるのをさけるために、日米の交渉団が共同でねつ造したものといえそうです。日本国内では、安倍政権とつながる民放

マスコミ各社とNHKがそろって、「もう決まっちゃいましたよ。反対しても無駄ですよ」といった雰囲気や国民に植え付けて、輸入食品はこれだけ安くありませんよ、といったことだけ繰り返して報道するという戦略であると思われまます。些末な方向へ論点をずらすという安倍政権お得意のやり口なのです。

NHKの報道の例

「大筋合意」が伝えられたあとの十月十六日にNHKは「TPPは日本に何をもらたすか」という生番組を放送しました。TPP交渉を行った甘利大臣と、他の三人の出席者。司会は今年三月まで二ユース9のキャスターをしていた大越氏。その中でTPPにはつきりと反対の立場を述べたのは東大・鈴木宣弘氏のみ。甘利大臣の得意げな説明に多くの時間を割き、推進派の大企業にとって都合のいいといったことばかりが目立ちました。甘利大臣を出席させる時点でNHKの意図は明らかです。唯一の明確な反対論者の鈴木氏が、TPPにとって最重要と思われるISD条項に言及して、批判を展開しようとしたところ、司会の大越氏は甘利大臣に「誤解だ」と一こと言わせ、そそくさと話題を他に変えてしまふといった不誠実な内容でした。この大越氏、二ユース9のキャスターを降りたのは二ユースの最後のコメントに安倍政権に批判めいた一言を言っていたのが、安倍氏がそれを見て気にくわなかったので、交代させられたのだという話がある記者

です。しかしこの番組では、安倍政権の都合の悪いことはひた隠しにするという役割を演じたのでした。彼にジャーナリストの良心が多少でもあるとすれば、ISD条項は必ず取り上げなければならぬ内容であるはずなのです。安倍の配下である舛井某が支配するNHKでは、そんなことは許されなかったのでしょうか。哀れという以外にありません。

なぜ政府はTPPの情報を小出しにするのか

TPP報道についての安倍内閣の戦略は「ゆでカエル」戦略とも言えると思います。これはつまり、いつペン情報を発表してしまうと、あまりに国民に反撥を買う内容なので、国民の怒りが爆発してしまうと予想して内容を小出しにしていくのです。つまりカエルは突然熱湯に放り込まれたら、暴れて飛び出してしまふ可能性が高いけれど、水から徐々に温度を少しずつ上げていけば、慣れてしまつて飛び出すタイミングを失い、最後にはゆで上げられてしまう、というものです。

安倍政権は「国民は忘れやすく、だまされやすい」と思っている節もあります。TPPの国会承認はあわてずに来年（平成二十八年）の参議院選挙の後にするのがいいと算段していると伝えられています。その前にもつてくると参院選に大敗してしまつと計算をしているのです。このような判断は、安倍政権のお得意の狡がしこく要領のよいものです。恐らくこれは広告代理店などのマーケティングサー

チに多くを学んでいるものと思われれます。我々は、このような政府の狡かしこい作戦に乗らないように目を光らせていることが大切です。

ぜひご覧いただきたいTPP報道の例外

これまで見たようにマスコミ報道の多くは政府側の情報の垂れ流しですが、私の知る限りただ一つだけ、皆さんにぜひ見て頂きたい番組があることに気づきました。これはTPPの危険性の一部を正しく指摘しているものです。

大阪朝日放送の『正義の味方』(十月十日放送分)「堤未果が解説 TPPの大筋合意で日本の医療制度が崩壊する」という番組です。この動画は動画サイト「ユーチューブ」で誰もが見ることができるようになっています。TPPの真の危険性を知るために、ぜひご覧になることをおすすめします。「ユーチューブ」のホームページから検索欄にこの表題を入力して検索するとすぐに出てきます。これを見て頂ければ、この文章の目的の過半は達成されます。(堤未果さんの出演するもう一つの動画「政府は必ずウソをつく」も一緒にみていただくとさらに理解が進むと思います)

この番組の中で堤未果さんは、東京の番組では、日本の医療制度・国民皆保険がTPPによって破壊される危険が高いということをわかりやすく解説しています。このようなTPPの本質的な危険性や、ISD条項の問題については、「東京(の放送局)では言わせてくれない」

と述べておられます。つまり在京のテレビ局ではTPP賛成派がすべて支配をしていてTPPの真実の内容について国民に隠している、報道に規制をかけている、ということなのです。この規制がどこからくるのかは容易に想像できます。政府からの圧力があり、政府に都合の悪い情報、とくにTPPの関税以外の投資・規制などのルール分野は、国民に知られると反撥が予想されるので、報道しないような命令が番組作成の現場におろされてくるのだらうと思われれます。この番組の姿勢は他のテレビ報道やその他の番組では見られないもの。「大筋合意」でTPPが何となく決まってしまったとしていますが、現実にはまだ合意内容も確定され明文化されるまでに時間がかかり、合意されても国会の承認がなければ締結されず、したがってまだTPPを止めることは十分にできるといふ事実もこの番組でしつかり述べられています。できるだけ多くの人々が、政府が隠し続けるTPPの本当の反国民的な姿を知って、TPPを許さない世論を作り出していく必要がありそうです。この記事を読まれてこの番組をご覧になったら、周囲の方々にぜひ広げて頂きたいと思えます。

大阪朝日放送のこの姿勢には大きな賞賛を送りたいと思います。しかしまたこの放送をきっかけに首相官邸や経団連などから放送局に圧力がかけられることが予想されますが、放送局はくじけずに、視聴者に真実を伝える姿勢を堅持していただきたいと思います。そしてTPPの

あまりにひどい国民を裏切る内容を国民に明らかにしていってほしいものです。そういう報道に対して、私たちは強く支持をしていきたいと思っています。

本当のことをどうやって知るか

日本のマスコミ報道が、これほど政府の都合のいいようにゆがめられ、政府の都合の悪いことは隠されてしまつていく現状で、新聞やテレビ、ネットのヤフーニュースやグーグルニュースといったヘッドラインニュースがあまり信頼できないとなれば、私たちはどうやって本当のことを知る事ができるのでしょうか。

一つはテレビや新聞でも、いくつものものを見比べてみるのが大切です。この夏、戦争法案の闘いの報道を見ていて政府の側に立つて政府見解をそのまま流すという報道をしていたのが、読売新聞と産経新聞、それにNHK。政府に一定批判的な報道姿勢をもっていたのが、毎日新聞と朝日新聞それに中日新聞系列の東京新聞でした。テレビ局もこの系列に準じて同じ傾向をもっています。参議院で安保法制の審議をしていた最中に、安倍氏は国会に出ないでわざわざ大阪に来て、読売テレビの、ほとんどヘイトスピーチまがいの討論番組に出演して厳しく批判されたことは記憶に新しいところです。このようなマスコミ報道だけでは限度があります。というのもTPPについて言えば、これらマスコミの中でTPPに対して本格的な批判を展開したのは、東京新聞だけなのです。他の新聞社はいず

れも社説でTPP推進を主張しています。これではTPPの負の部分に光りをあてる報道ができるわけがないと思われ、では私たちはどのようにして、マスコミには報道されない「本当のこと」を知ることができるのでしょうか。それにはやはりインターネットをうまく利用することを考えることとなります。ネットには実に多様な情報が飛び交っています。その中には悪質なものも多々ありますので、情報の選択が重要になります。ネットでは情報の比較が簡単にできるのはいとこです。そこで、ネットの良質なサイトでどんな報道がなされているかを自分で確かめることが必要になってきます。比較的信頼度の高いと思われるサイトやブログの例を紹介しましょう。

・しんぶん「赤旗」のサイト（共産党が嫌いという方でも、「赤旗」には一般のマスコミの載せないニュースや、別の視点からの記事が載せられます）

・「東京新聞」のサイト。（政府に対して批判的な記事が多い。ジャーナリズムの良心を残している）

・「植草一秀の『知られざる真実』」（オールジャパンプラザと共生）の提唱者のブログ）

・「TWJ」（岩上安身氏の主宰するウェブジャーナル）

・「editor」（月刊誌『KOKKO』編集者・井上伸のブログ）

・「日刊ゲンダイ」（ゴシップ記事も多いが、ここでは政治記事）

・「LITERA」（やや過激に傾くところがある）

などのサイトは見て頂く価値はあると思います。

さらに効率的にニュース情報を集めるには、ツイッターを利用するのが有効です。これは無料で簡単にアカウントを取

得できるので、とくにアカウントなしでも読むだけができます。ツイッター

のホームページを開き、気になるワードをその検索欄に打ち込めば、その語句が

含まれるツイート（つぶやき）が出てきますし、たとえば「安倍政治を許さない」などと、語句の上に「#」（ハッシュ

タグと言われる）を付けると、このタグを付けたツイートが選択されるようになって

います。またこの「芥川だより」の寄稿者である石川吾郎氏のツイッター

（ツイッターから検索欄に@55sogoを入力すると出てくる）の記事を読んで、

そのリンク先の記事を読む。また彼がフォローしている人たちのつぶやきを見て

もよいと思います。リンク先のつぶやきや、ブログなど気に入ったものをブック

マークしておいて、チェックするようにするとマスコミではあまり出ない情報を

知ることがができます。また自分でもつぶやきを発信してみたい方は、アカウント

を取得してつぶやいてみるのもよいと思います。反応がくるのはうれしいもので

す。お試しください。ただネットの世界は本当に多様で、中には悪質な者もいま

すので、そういった者に引つかからないように、自己責任でお願いします。（堤未果さんをフォローすると、彼女はフォロー

返しをしてくれるので、ちよつとうれ

しかったです。）

ツイッターとともに動画サイト「ユーチューブ」にも、貴重な情報が投稿されています。

私がお勧めするのは、上に紹介した堤未果さんの出演している二つの動画です。

ここでTPPのISD条項というものがいかにひどい代物であり反国民的である

かを分かりやすく説明してくれています。二つ目の動画の前半はイラク戦争で米

政府がついた驚くべき嘘を解説しています。必見です（堤未果さんの出演してい

る動画は数多くあり、そういったものからいろいろご覧になるのもいいかもしれ

ません。また「オールジャパンプラザと共生」の総決起集会の動画も見られるよう

になっていますので、これもおすすめ

今般の大阪ダブル選挙について

NHKはほとんど放送法違反というほど橋下維新の応援団と化しています。十月二十五日の「日曜討論」では、まだ政

党としても存在していない「おおさか維新」の「予定メンバー」を出演させて、

政党としての実績をもつ「生活の党」などを出演させませんでした。これは不当

で偏った放送法違反の疑いの濃いものです。また通常のニュースの中でも「維新」

の候補の動向などを異様に詳しく報道することが目だっています。これは、安倍

＝橋下＝榊井NHKというホットラインができてくることに由来しているに違

ないでしょう。こんなところに、先ごろ

の安倍・橋下密会の結果が反映されているのだからと想像させます。

「安倍総理が日本を滅ぼした」

これまで述べてきた危機のほとんどは、安倍政権が民主主義を踏みにじって横暴

に権力を振り回していることに起因しています。辺野古基地移設問題で翁長知事

が「強権極まり」と語った言葉はまさに安倍政権の本質を表現しています。早

急にこの独裁志向の政権を打ち倒すことが、わが国と国民を守る唯一の方法だと思

われます。共産党が「国民連合政府」構想を提唱し、野党勢力を結集する選挙

協力を唱えています。これは大きな選択肢だと私は考えます。なにしろ自民党

は前回の総選挙でわずか十七%の得票数で過半数の議席を占めてしまっている

のですから、野党勢力が結束すれば横暴の限りを尽くす安倍政権を打ち倒すこ

は難しいことではないはず

投資の神様とも呼ばれる米国の大投資家ジム・ロジャース（この人は投資により日々巨大な資産を稼ぐ、人民の「敵側」

つまりアベ側の人物ですが）は、インタビューで次のような言葉を吐いています。

「安倍晋三首相は、日本を破綻させた人物として歴史に名を残すことになるでしょう。いまから十年二十年経って日本人

の皆さんは気づくでしょう。安倍総理が日本を滅ぼした」と。これは主に経済政策

について語っているのですが、日本の政治のすべての側面について正しいことが

証明されてきていると思われ

◆「生きていくための基本が政治だ」と戦争法を怒り友言う

この国の憲法を読んだ夏の日の心そのままに政治を見た夏——二〇一五年の夏が行った。

あれは小学校の五年生か六年生のときか。中学生になつていたか。半世紀も前のことだから定かではない。月刊の学習雑誌の付録で読んだような気もするから、小学生のときかも知れない。日本国憲法を初めて読んだ時の驚きを今でも覚えている。憲法が国の最高法規であることは漠然と知っていたような気がする。その上でのこと。私は、あるいは私たちは(私たちといつてもせいぜい自分の家族くらいの範囲であろうが)、何という国に住んでいるのか、住んでいたのかと胸がどきどきした。前文にある先の大戦の惨禍への反省、平和への誓い、『名誉ある地位を占めたいと思ふ』という諸国民への信頼等々を読んだとき、こんなことを言つて(書いて)いいのかと思つた。それは、子ども心にもほとんど『革命の宣言』のように思えた。革命がどういうものかはもちろん知るはずもなかったし、今だつて知らないが、自分の国は何かとんでもない大きな理想を実現すると言つていいらしいと思つた。カール・マルクスとフリードリッヒ・エンゲルスが共同で執筆した『共産党宣言』(一八四八年出版)を

大学生のときに読んだ衝撃に似ていると言えば誤解を招くか。同時に、現実は今然そうなつていないではないかという疑問もあつた。九条第二項に『陸海空軍その他の戦力は、これを保持しない』と言いながら自衛隊があるではないかと素朴に思つたものだ。自衛隊法が施行されたのは、私が小学校に入学する一年前、一九五四年(昭和二十九年)のことである。

また、基本的人権や『健康で文化的な最低限度の生活を営む権利』の記述などは、自分を含めてすべての国民の独立と自由平等が保障され、個人の尊厳が侵されず、貧困からも解放されることを意味すると思つた。要するに、本紙第一〇四号の編集発行人による巻頭言にあるとおり『政治は生きていくための基本』であり、日本国は国民が生きていくための基本を整える政治をする」と憲法は宣言していた。

もちろん、理想と現実とは二つの別のことである。それはすぐに分かつた。『もはや戦後ではない、戦後は終わった』と聞いたときは、何が解決して何が終わったのかと思つたし、今なら、それでは戦前が始まつたのか、と言つたろう。『戦後民主主義は死んだ』と聞いたときは、問題は憲法の精神がまともに実現していないことだろうよ、と思つたものである。戦後の教育で権利ばかり主張する人間が増えて、自由と平等を履き違えているなどの声を聞いたときは、憲法に言うような自由で平等な社会はこの国にいつの間にかできたのかと腹が立つた。

しかし、それにしても、である。安倍

自公政権下の政治は、とりわけ昨年からの夏の夏にかけてのそれは、この半世紀にわたる政治への失望を遥かに超えた反応を多くの人々の中に引き起こし、私の中にも引き起こした。失望を超え、怒り、異議を申し立てる反応である。

生きていくための基本が政治である、などと決して思うことはなかつた(と思える)老若男女が、この夏なぜ、生きていくための基本が政治であることに気づき、誰が強制したわけでもないのに自ら政治的行動に出たか。出たか——過去形で書いたが、この政治的行動はなぜ今も続いているか。戦争法(安保法制)を廃止せよ、安倍政権は退陣せよ、安倍政権を支えた政治家たちは政治の舞台から去れの声は消えてもいないし衰えてもいないと私は思う。それはなぜか。

戦後七〇年の日本の平和と経済的發展を支えた大きな要素として日本国憲法があることは誰も否定できないだろう。立憲主義、民主主義、平和主義に立脚し個人の尊厳を守る国として戦後日本はあつた。政治に対する失望はあつても、とにかくにも政治が戦後日本のこの枠組みを大枠として変えることはないだろうという政治に対する暗黙の信頼が成り立っていたらと思う。それは保守政治の器量の大きさによる一面もあるかもしれないし、政党や労働組合等の国民の側に立つた政治的革新的な組織的抵抗力による一面もあるだろうと思う。その戦後の枠組みが社会の表舞台で大きく揺らぎ始めたのはいつ頃だろうか。八〇年代か九

〇年代か。二十数年前には今日につながる兆候は明確になつていた。政治劣化・墮落の引き金を決定的に引いたのは、まちがいになく政党助成金の導入(一九九四年)と小選挙区比例代表並立制の導入(一九九六年)であるだろう。税金で政治ができることは政治が国民から遠ざかることであり、小選挙区で政治家が選ばれることは国民の多様な声が抹殺されることを意味するからである。政治の劣化・墮落と前後して進行した派遣労働の解禁となし、くずし的な拡大は、戦後日本を支えた『一億総中流社会』の崩壊・格差社会の始まりを象徴していた。要するに社会の病的な崩壊が始まつていたのである。今や、戦争法成立後の目くらましに『アベノミクス』は第二ステージへ。新三本の矢などと言相が華々しく言つてみても、もはや「一億総所得倍増」などとはとても言えない国になつてきているのである。

国民の組織的抵抗は社会の表舞台から姿を消した。小さな市民運動的な活動はさまざまに分野で広がっていったが、横断的な連携は生まれなかつた。ある意味で政治(政権)はやりたい放題であつたかもしれない。そのときなぜ国民的な抵抗が生まれなかつたか。戦後の民主主義教育が、安倍政権がそれを憎むような形では、主権者教育に成功しなかつたからだと私は今でも思っている(第一次安倍政権はその理想が実現していないことこそが問題であつた教育基本法をあつという間に改正してしまつた。それほど安倍政権は戦後教育を目の敵にしている)。国

民に明確な主権者意識がなければ、国家に主権意識が生まれるはずはない。組織に属した個人はあえて政治に目を向けずやがて組織に埋没することを慣わしにする(会社も個人にとつては抵抗しがたい組織であることはよくあることである)。組織もそれを求める。国も同じ。寄らば大樹の陰、核の傘、抑止力、グローバリゼーション、等々と大いなる同盟国に嬉々として従属し恥じることもない。一〇月十八日相模湾上で行われた海上自衛隊観艦式で安倍首相は米海軍横須賀基地に配備されたばかりの原子力空母ロナルド・レーガンに乗艦した。首相である者の米軍空母乗艦はもちろん初めてのこと。テレビが映す首相の嬉々としてはしゃぐ姿は、たとえば、パパの車の運転席に初めて座らせてもらった幼児がハンドルを握って喜んでいいるのと同じには余りに異様な光景であった。戦争法が成立し、やがて米軍の二軍として『わが軍』も従う、私はその最高指揮官であるという誇りに輝いているかに見えた。一国を代表する者が外国の軍艦に乗る姿に、私は昔どこかで見た、一九四五年九月二日東京湾に浮かぶ米海軍戦艦ミズーリ号甲板で行われた大日本帝国の降伏文書調印式の光景を重ねていた。個人と国家の主権に対する意識のありようについて言いたい放題のことを書いたが、それでも私は、個人が世渡り上手になることと、国家が国際社会を金魚のフンになって泳ぐこととは別のことだと思っっている。

社会の病的な崩壊が明確に国民の眼前

にさらされ意識に刻まれたのは、二〇一一年三月十一日の東日本大震災、とりわけ東京電力福島第一原子力発電所の過酷事故に際してであっただろう。この国はこんなに飛んでもない、無責任でいいかげんな国だったのか、と。この事故が、小選挙区制等が目指した二大政党下での政権交代後に起きたことはいかなる天の采配であったか。それまで政権にあった者たちは自分たちの政権下で事故が起きなかつたことに胸をなでおろしたに違いない。不謹慎な物言いと思うかもしれないが、政権に返り咲いてからの事故対応や原発政策の実施を見ればそうとしか思えない。備えがなかつたのだからどうしようもない面もあるが、新しく政権についた者たちの対応も慌てふためくばかりのようであった。東電に至っては、今日に至るまで当事者としての責任意識さえ感じられない。官民挙げて日本はいったらかれほど墮落した国になってしまったのか。被災者には被災の悲劇の上にもこの思いが覆いかぶさり、広く国民には社会や自分はこれまでと同じままでよいのかと根源的な問いが突きつけられた。時代の進行に加え原発事故が重なったことでこの問いは阪神・淡路大震災を超えるものがあつたと思う。

そのころからであろう。反原発反核、反貧困、反TPP、反辺野古、反派遣等々が、それ以前とは違う形で人々の運動の課題になり、同時にこれら諸課題の根源に日本の政治の問題が共通して存在すると認識されるようになってきた。その典

型が官邸前あるいは国会前で継続して行われてきた反原発行動であろう。原発NOは、現在から未来にわたって自分が生きていく社会のあり方と関わって多くの人々にとらえられた。一度事故が起きると取り返すことができない被害が長く続くこと、幸運を天に任せて事故に至らなくても十万年単位で誰も責任を持つて処理できないような核廃棄物問題があること、したがってそもそも初めから明確な管理責任体制が確立したもので核は扱われていないこと、あるいは責任を持つて核を管理運用できる科学技術を人間は持つていないことがはっきりしたのである。こういう気の遠くなるようなことを生活のレベルに引き寄せて考えれば、誰が考えても、原発は要らないことになるし、核兵器も要らないことになる。命と引き換えるくらいなら電気代が上がる方を選ばず、電力使用を我慢する方を選択するだけのことである(実際問題として、二〇一三年九月から二〇一五年八月の川内原発一号機再稼働までの間、原発稼働はゼロであり、それでも夏も冬も電力は足りていた)。原発NO、再稼働するな、の官邸前および全国での行動は生活者の参加によって新たな大きな盛り上がりを見せて来た。他の諸課題についても然り。大きな政治課題が自分自身の現在と未来の生活の課題と結びついてとらえられ感じられ考えられ、そして行動に移されたとき、それを止めることはもはや誰にもできないであろう。それはもう生活の一部になったからである。

そこに昨年来の安倍自公政権による安保法制問題が、国民にとつては、降つてわいたように起きた。解釈改憲による集団的自衛権の行使容認は憲法に対するクーデターであり、他の政治課題とは明確に一線を画するものであつた。個々の政策の問題でなく、立憲主義の破壊であり、民主主義の破壊であるからである。戦争立法、戦争法案とは言い得て妙であり、憲法が宣言した平和主義の破壊でもあつた。

戦後七〇年の節目の年に、政権の政策がこれほど破壊的になると、国民の反応は広範で素早かつた。『国民の安全と平和のために』とどれだけ首相が唱えてみても、この法案は、政府が数十年にわたつて確立させてきたいわゆる専守防衛政策を投げ捨て、集団的自衛権を行使して自衛隊が米軍の二軍として『後方支援』という戦争行為を必要であれば地球上どこでも行うものであることを、国民は直感的に理解したと思う。私の周りのほとんどすべての戦前および戦中派の戦争体験者は「馬鹿じゃ、安倍首相は一体何をするつもりか」と吐き捨てるように言つた。地方新聞の「読者の文芸」川柳欄への投句などを見ても夏には戦争や平和が詠まれるという例年の動向を遙かに越えて、昨年七月一日の集団的自衛権行使容認の閣議決定前から強行採決後の今に至るまで、安倍政権への批判句が掲載され続けている。戦争と平和の問題がこんなところまで、というのが筆者の正直な感想であつた。

この間の、国会前および全国での戦争

法に対する老若男女の反対行動は、青少年、若者から壮年、老人に至るまで市井のごく普通の生活者によって担われた運動であった。政府が戦争法は成立したと称しても、その廃止、安倍政権の退場を求め声は止まない。なぜだろうか。政治とは生きるための基本だ、などと意識することさえなくとも、憲法が作り上げてきた戦後日本の枠組み、日本の国の心とかたちへの思いは、多くの国民の血肉と化していたのだ。それだけは変えるな、憲法を踏みじり民主主義を破壊して勝手に変えるのを許さないとの思いが、自分はどうな社会に生きてゆくのかという生活者の思いと重なったのだと思う。安倍政権は、戦争法によってこの国の老若男女のいわば『逆鱗』に触れたのである。逆鱗に触れた国民がその目を改めて原発、貧困、TPP、辺野古、派遣労働等の政治的諸課題に向けて、それら諸課題と戦争法の問題が実は根は一つにつながっていることに気がついたりもしたであろう。『九条の会』の呼びかけ人の一人である評論家の故・加藤周一氏がどこかに書いていたと記憶するが、『自己の課題に深い信念をもつ者は容易に戦わず、しかし戦うときには断乎として、たとえ一人でも戦うのである』という言葉がある。その自覚が国民の胸に生まれ、刻まれたのだ。また言う、『魂は表現されなければそれが存在するかどうか、本人にとってさえはつきりしない』と。魂を表現し、声をあげ立ち上がったのは一人で

はなかった。

広範な国民の運動がどこにどう収斂していくか。行動の中に身を置き、目を凝らしていようと思う。この運動にも当然盛衰の幅はあるかもしれないが、運動があきらめられ止むことはないだろう。この国の未来の希望はここにある、と運動に参加した者たちははつきりと感じているからである。

運動の目標は、戦争法を廃止し安倍政権を退陣させて立憲主義と民主主義および憲法の精神である平和主義を回復すること、つまり昨年七月一日集団的自衛権行使容認の閣議決定以前の状態に国の政治を取り戻すことである。日本の政党政治が国民のこの願いと運動をどのように理解しどう関わるができるか。それが問われるだろう。国民の運動に国の未来がかかっている、こんなことはかつてなかったことだ、と思う。

（かたちは心であり、心はかたちになる
大分の素老人）



政治が霞んでいく(3)

憲法は民衆を守ってくれる宝

下村 嘉明

恥ずかしながら、私は憲法の事をよく知りませんでした。社会科学の時間に習ったような気がする程度で、自分とは関係ないように考えていました。しかし、今回の安保法制に反対する学生がデモで「民主主義はなんだ！これだー！」と叫ぶのを聞いて「どうして、これだー！」なんだらうと不思議に思い勉強しました。

憲法は民衆の生活を守るために大変よく考え作られています。これまでの歴史から学んだ人類の英知を集めて「いかに貧しく弱い人々を権力者の横暴から守るか」この事を徹底的に考えて出来た宝物です。難攻不落の砦のように作られた憲法は、これまで幾度も時の権力から疎ましがられ嫌がられてきました。強いタガである憲法が権力者を縛り、民衆が戦争の犠牲者にならぬように、最後の守り神として見守り続けてきたのです。

憲法の条文を読めば、国民を守るためにあらゆる点から考察して書かれています。最重要課題は貧しい民衆を守ることが憲法の最大のテーマになっています。どうすれば貧しい弱い人々を救えるのか？守り続けるためには何が大事なのか？このことを究極まで考え洞察して

「民衆を守るには戦争をさせない、民衆を戦争の犠牲者にさせない」そのためにはどうすればいいのか。「戦争をしない国にする以外に民衆を守る方法は無い」と結論を出したのです。

戦争は黙っていれば、雑草が生えてくるように絶え間なく起きます。ややこしい民主主義の手続きに嫌気し目先の欲得に呆けた政府は、いつでもどこでも戦争をやりたいのです。この戦争願望はあらゆる権力者から消えない業なのです。どんな政府になっても、戦争で決着させようと息巻く連中がいるからです。独裁者なら1秒で決まる事柄でも、民主主義では何年もかかることがあるからです。その手続きに我慢できなくなったら戦争です。戦争は軍需産業を儲けさせ民衆を苦しめます。いつも軍と産業界は戦争大賛成ですから、政府は利用されて戦争を始めてしまうのです。

泣かされるのは弱い民衆です。すべてを「お国の為」というウソで財産はおろか命まで彼らの道具としてとことん利用されるのです。どんな言葉を使おうとこの事実が変わりません。すべての政府が行う戦争の内情はみな同じです。権力者と産業界の謀略なのです。非常に大きなウソなので、一見するとわかりづらいのですが、戦争とは貧しい民衆からすべてを巻き上げる茶番劇なのです。

憲法はそんな事をなくするために、あらゆる思考をかさねたり着いた結論が戦争をしない、戦争放棄なのです。この事でしか民衆を守る方法はないと。このように憲法は、民衆の側にあつて盾となつて権力者と対峙するものだから、民衆が憲法を守る必要はないわけで、権力者に守らせなければいけません。だから政府に「憲法守れ！戦争するな！」と抗議するのは当然の行動なのです。

憲法九条は、憲法のコア部です。だから九条が大事なのです。権力者には九条が邪魔なのです。歴代の政府は、この九条のおかげで戦争をしなくても出来なかつた。民衆を守つてきてくれたのです。

ところが、今度の安倍政権はとんでもない事を考えてやりました。解釈を変えたのです。誰が読んでも戦争しない戦争放棄の文面を戦争が出来る解釈変更をしたのです。むかし、ヒトラーが使つた手らしいのですが、これを認めれば独裁国家になります。どんなに立派な憲法でも解釈変更でなんとでもなるからです。そうなれば立憲主義は壊れます。独裁者の好き勝手がまかり通り、民衆は地獄にたたき落とされます。

今、日本は本当に恐ろしい状況になつてきています。独裁国家か立憲主義に基づいた自由と民主主義の国かの分岐点に立っています。何としても安倍独裁政権

を早く退陣させ憲法を守り抜くことが、自分たち弱い者の生活を守るためにも非常に大事なのです。最優先にしなければならぬ事です。今しかないのです。

政府に憲法を守らせれば、私たちは平和な暮らしが出来るのです。生活保護世帯が過去最高になることもないのです。暮らしを守る社会保障も中身を充実させ安心して老後を迎えられます。世界最高の個人貯蓄高を持つ日本が出来ないはずがありません。アメリカに隷属し日本の宝を世界的な大企業と軍需産業に横流する自公政権は国民への最大の敵です。

こんな事は中学生でもわかることです。私は、これほど大事な憲法をこれまで理解していなかったことを反省し、これからは憲法を壊されないように抗議し続けます。常に政治家を監視し抗議し続けることが民主主義であり、憲法を守つて行く事だと考えるからです。誰かがやってくれるだろう、と黙つていては憲法も民主主義も自由も守れないからです。普段の努力をして崇高な目標である世界平和に微力ながら貢献したいと思ひます。



哲学屋のつぶやき (16) 新自由主義の哲学、それはどこから来たのか

祖蔵 哲

先月はお休みをいただきました。今年の夏はまさに記録的な暑さになりました。後期高齢者に差し掛かりつつある者にとつては乗り切るのに大変な体力を必要とし、秋にかかる時期になり蓄積していた疲労が出て体調の不良を招いたのでしよう。最近の異常気象は地球規模に広がる様々な災害をもたらし、もはや地球温暖化だけでは説明がつかないレベルまでに進行しているようです。科学が自然をコントロールできるとの確信を人間ももつたのは産業革命期よりのわずかに二〇〇年ほど前ですが、地球の歴史から見ればほんの一瞬前のこと。そんな確信など全く根拠のないものかもしれません。

さて、先々月よりのテーマ「新自由主義」はもう特集が終了しているかもしれませんが、私はもとより哲学者、現象を説明するのではなく、その根源を説明するというのが職業的役割です。十九世紀ドイツの哲学者ヘーゲルは「哲学がその理論の灰色に灰色を重ねて描くとき、生の一つの姿は既に老いたものとなつていたのであつて、灰色に灰色ではその生の姿は若返らされはせず、ただ認識されるだけである。ミネルヴァの梟は、日暮れて初めて飛び始める」と『法哲学』の序文に書いている。有名な「ミネルヴァの

梟」の名言である。つまり哲学がいくら論理を重ねても灰色の上に灰色を塗つていく如くいつまでも真理は見つけ出せない、哲学の知は現実がその形成を完了して初めて時代を遅れて認識するのみであるという。そういった意味の哲学から現代の潮流を考えてみましょう。

哲学的に考える前に新自由主義の経済思想を復習しましょう。先々月号で書いたようにその思想背景は三つあります。まず第一、富の「分配」より富の「創造」を優先させること。第二、需要より供給に重点を置く。第三、景気循環をトリクルダウンとして捉えること。これが現在経済世界の潮流思想です。つまり、社会の富は「国家」が公平に分配するのではなく新しく富を生むところへ優先的に回す、そしてその人々は低賃金や高生産効率で低価格、高機能の製品を供給し多くの人々に買わせる。その結果獲得された富が彼らを通じて「下流」に分配されるという「しくみ」です。価格は重要と供給で決まるといった古典的経済学の理論は現在の社会ではどこにも見られません。現実には需要は供給によって作られるものとなつており、巧妙な商品の宣伝広告により人々は生活に不要なものまで争つて購入しようとしつづけます。さらにこの思想の背景的特徴的なのが「国家」の機能制限です。どのようにしてこのような思想が生まれるに至りそして現在の主流になつているのか考えてみましょう。

先ほど時代を遅れて語るのが哲学の一

つの役割でもあると言いました。時代というとはやはり百年、一世紀単位くらいになるのでしょうか。現代がどのようになり形成されたのかはそれくらい遡らなければ解明できないでしょう。現在は二十世紀初期ですがどうやら十九世紀末くらいまで行くとそのヒントがあるようです。十九世紀末というところから百年ほど前に起こった産業革命による社会変化の行き詰まりや科学万能思想の変化そして西欧的価値観のゆらぎが問われていた文字通りの「世紀末」。その様態をあらわす当時の代表的な都市が「ウィーン」。世紀末のオーストリア・ウィーンは西歐文化の交差点でもありました。ゲルマン、スラブ、そしてオスマントルコを通じてのアジア文化との交流。その中で芸術、科学、哲学、経済学等すべての学問分野にわたり斬新なアイデアが爛熟しました。その潮流は次の世紀二〇世紀にまでおよびました。哲学はウィーンでも盛んでありましたが、世界的にみても哲学が当時扱っていたものは「科学」との対比であり、またその反動としての「人間」の在り方でした。古典的な哲学の問題、「自由」や「幸福」などは「結果」として出てくる有用性で決まる」という「結果」を重視する思想「功利主義」が主流を占めるようになり、この考え方は現在も続いています。この考えの根底には人間の思考、理性への不信があります。本来、哲学はこの人間の「理性」について考えなければ

ならないのですが、その議論が認識はどうして可能かという一見自然科学と合するような方向に流れているような傾向にありました。そして今もそれは続いているかのようです。現在の哲学は、人工知能は可能かとかこの世界の他に世界は存在するのかわからないような自然科学との境で細々と存在しているような思いがします。

さて、その世紀末ウィーンに生まれたのが新自由主義の源流ハイエクです。経済学者でありますが哲学的論文も多く残しています。この時代の哲学者が先の述べたように時代に対する発言や分析が少ない分、かえって経済学者のほうが哲学的思考をしているようです。経営学者として有名なドラッカーも同じウィーンにハイエクより一〇年後に生まれています。彼も同じような哲学的な思考をしています。第一次対戦後のウィーンはシュペングラーの「西欧の没落」がベストセラーになるような不安定な中で、ドイツでは高度に民主的なワイマル体制のなかでヒトラーのナチス政権が誕生しさらに混乱の度が増します。ハイエクは当時の経済学の主流である「限界効用の理論」すなわち価値は生産費、労働時間で決まるといふのに反対しそれは消費者の必要でまるといふ心理主義から出発し、「懷疑主義」的立場をとります。これは十八世紀のD・ヒューム以来の「昨日太陽が東から昇ったとしても今日も東から昇る

とは限らない」という徹底した「経験論」批判です。「今まではこうだったから」という「経験」は「合理的推論」としてのみで、それをいくら集めても、それらから推測して（＝帰納的に）結論を導くことのできる因果関係はどこにもない。それは単に「習慣」であるということです。以前にも説明しましたが、ここからカントが「コペルニクス転回」とよばれる、人間が物を認識するその仕方を説明しました。「認識が対象に従うのではなく、対象が認識に従う」という転換ですがこれにより人間の理性、思考の限界が根拠づけられたのです。少し難しくなってきましたが、要するに自然科学がどこまでも人間の能力を拡大できるといふのを制限しかえって人間は敢えて道徳的理性でもつてその限度を逆に制限すべきであるとしたのです。

さて、一九二九年一〇月のウォール街発の世界大恐慌は古典派経済学の理論にとどめをさしました。すなわちアダムスミス以来の「神の見えざる手」による市場の自然的制御がきかなくなり市場メカニズムへの信頼が揺らいだからです。「自由放任」の終焉後登場したのがケインズをはじめとする市場コントロール派です。ケインズは不況の原因を消費の過小と捉えました。そして消費を喚起するために金利を下げて貯蓄志向を減らすことであると考えたのです。ハイエクはこれに対して異を唱え、ケインズは官僚であり

政府介入を前提としていると批判しました。そしてほぼ同時にその矛先を社会主義への戦いに向けました。まず計画経済への批判です。先ほども書いたようにハイエクは徹底したヒュームの「懐疑派」、経験による推測を含む意思決定を排除します。そしてそもそも社会主義体制における価格の決定というものに疑問を持ちます。つまり資本主義社会では商品の価格は財産権、所有権をもつ個人の自由意思の統合で決まるが、それらが存在しない社会主義では価格をどのようにつけるのか。この決定をするためには膨大なデータと計算が必要になると言いました。しかし歴史的にはソヴィエト連邦などでこれが実施されました。そしてコンピュータの登場により膨大なデータの処理も可能になったのですが、結果この歴史的実験は破綻しました。その原因は別なところにあります。データ提供者である組織官僚が自分達の権益を確保するために改ざんが行われたらしいということです。真相の程はわかりませんがハイエクはこの社会主義というものを徹底して攻撃しました。それは「歴史主義」に対する批判です。哲学的には「論理実証主義」批判と同じで、「反証可能性」のあるもの、つまり反対論の余地があるもののみが「科学的」とするものです。この意味でのマルクスのいう資本主義から社会主義共産主義へという「科学的歴史観」が否定されたのです。そして個人より全体を

優先する全体主義と同等に社会主義も扱われ彼らの攻撃対象となりました。

ハイエクらの新自由主義は「懐疑主義」から出発し「合理的思考」批判をへて「普遍的法則」は存在しないという信念のもと恣意的な合理性を批判し、現在は極端な「自由放任」になつてきています。この原因には社会主義的経済の破たんと言本主義での構造的不況の克服が大いに関係しているように思われます。つまり世界は合理的理想社会の実現に必然的に失敗した、しかし現実の資本主義社会は一向に良くならないという世の中の「焦り」がハイエクらの「超個人主義・自由主義」を現在の主流にしているのです。

ではハイエクはどのような社会をあるべきとしていたのでしょうか。一九七四年ハイエクはノーベル経済学賞を受賞し、その時点で今まで極端な思想として敬遠されていた彼の理論は世界的に再評価されたのです。これを機に世界は彼の考える方向へ流れました。一九九四年に亡くなったハイエクは預言者でもなく社会的指導者でもなかったのですが残された鋭い哲学的思考が歴史の預言書として今機能しているのです。

ハイエクは社会、市場における人間は完全な情報をもって行動するのではないが、それは組織されている情報よりも勝っていると言います。例えば、ガソリンの値段が上がっているとすると個人は何が原因かという情報を知らなくてもそれ

の節約に努める。これが市場の機能である。また計画経済の危険については、資本主義市場においては計画経済の失敗は一時的な不景気を招くだけであるが、社会主義計画経済の失敗は国家の破たんを招くと警告している。

自由という事に関してもハイエクは独自の考えをもっている。ご存じのように「自由」には二つの種類がある。一つは消極的自由と言われているものでこれは「くからの自由」と言われるような普通感覚する自由で他からの制限からの自由のことで他者から見た自由です。もう一方の「積極的自由」というのは「くへの自由」という自己実現を制限するものを排除するという自己からの見た自由のことです。消極的自由は「自由放任」積極的自由は「自己実現の選択肢の増加」ということでしょう。少しわかりにくいですが「結果の平等」と「機会の平等」という事に置き換えれば少し理解しやすくなるかもしれません。積極的自由の方がわかりにくいと思いますが、例えばこれはアメリカで実際に行われているアフアマティブアクションという優遇制度ですが、アメリカでは人種ごとに入学定員が異なっているというものです。これは過去の歴史的差別を改善するための措置であり勉学の自由を個人の能力の過去の状況にさかのぼり是正機会の自由を与えようというものです。このような積極的自由をハイエクは国家の恣意的一時

的なものでありかえって人間の行動を束縛するものであり全体主義に通じるという批判した。

ハイエクの考え方はそもそも人類というのは有史以来長期間、遊牧移動生活をしてきた、分配というのはその時に必要に迫られて発生した概念でありそのような時に機能していた行動であり、これが今だ遺伝子に組み込まれているが現在のような定着文明には合致しないと主張している。彼は現在のインターネットのような個々の無秩序が全体として自立的秩序として機能していくと確信していた。

ハイエクの思想をみるとそのキーワードは「合理主義への懐疑」「人間理性への不信」「全体より個人」「全体主義、社会主義への嫌悪」「干渉なき自由」などになります。そして現在、歴史はそのような方向に進んでいる。歴史は過去の経験から学び進化していくものであるという歴史観に立つてみれば現在はそんなに違和感はないかもしれない。しかしそれは進化であるのか単なる変化であるのかどうかはわからない。しかし確実に問われるのは「人間理性の可能性」である。そして人間は過去の経験から何を学んだのか、極端な飛躍ではなく地道に考えなければならぬ。合理的理性主義の放棄は現在進行し確立されつつある見えざる階級支配体制の望むところではあると思うのですが。

闘病記 (30)

梵店主

回診に来た教授が「ぼちぼち、退院の事をかんがえましようか。入院はどれくらいになりますか。「三ヶ月です」とよつちゃんは答えた。「なぐなりましたね」教授はつづけて「この調子でいけばあと少しで退院できそうですね」と返してきました。よつちゃんは、すかさず「できれば出来るだけ早く入院させて欲しいです」とたのんだ。教授は何も答えずに「それでは」とだけ言つて次の病室へ回つていった。教授が行つたあと、すぐに担当医がきて「よかったですね、あとで退院の打ち合わせをしましょう」とだけ言つて教授の回診について行った。

よつちゃんは、冬の気配が怖いのである。気温が少し下がってくると身体が敏感に影響を受けるからである。筋肉が少なくなり神経が感じやすくなっているから、厚着をしても足先や胸が痛むような状態になつてくる。ハワイで静養したい気分なのである。

脂肪と骨と筋、それに神経だけになつてくると少しの環境の変化にも過敏に反応してしまう。いかに筋肉が身体を守ってくれているかがわかる。筋肉は三〇〇ぐらいあるらしいが、その一部が壊れただけでこれだけの苦痛を感じる。筋肉は筋が炎症をおこすことによつて出来る。少し無理をして筋肉痛を起こさないと筋肉はつかない。意外な筋肉のでき方ではあるが、その筋肉が破壊されていくとは

普通の人には想像できない。患った人でなければわからない。だから周りの人の理解もえ難い。

次の日、担当医がきて「そろそろ退院のスケジュールを考えましょうか。一応病院の決まりではステロイド剤の三〇ミリが目安になっています。いまは三十五ミリですがCPRの値をみながら減量しましょう。しかし、下村さんは、運が残っていたんですね」と言った。

医者が運を言いだすほど、この多発性・筋炎は難しい病気なのである。簡単に治る病気であれば特定疾患に指定されない。特に、よっちゃんの場合、投薬効果がなかなか出ず、治療方針が度々医局の検討会で議論された。教授など多数の医師たちは、ステロイド剤より強い免疫抑制剤を使うべきだとか他の治療方法を考えるべきだとかいろいろあったらしい。これまで担当してくれた数人の研修医たちが、治療の変更に反対してくれたおかげで今に至っている。

確かに、よっちゃんは運が残っていたと思う。ステロイドの減量を決める各段階の時に、それまで高かった数値が下がり、ぎりぎりOKというありさまだったからである。ほんとに神や仏がついているかのように最後の最後に数値が基準値まで下がり次の段階へ移行できた。投薬効果の出方は患者によって違うのはあたりまえではあるが、多くの症例から一応の目安が来ていてそれが判断基準になる。よっちゃんは、山登りでも幾度も危ない目にあつたし、商売でも運を目いっぱい

使ってきたと思うから、もう残っていないと観念していたが、まだ残っていたのである。多額の治療費がかかる癌ではなく、治療費が免除される病気になったただけでも運がある。

大病院にはいろんな患者がくる。まず病名がつかない人、なんの病気かわからない人、こんな人は入院も出来ないし治療も受けられない。また通常の薬では効果が無く、保険のきかない高い薬を使う人もいるらしい。一本二〇万の注射があると聞いた。保険がきかず二〇万の注射射つていたらすぐ破産する。

病名がわからなかった時、まわりの者たちは、わからなければ、京大病院でも東大病院でも行って診てもらえと騒いだ。しかし、余裕がなければ東大病院でお世話になることは出来ない。隣のベッドの爺様は、わざわざ東京からきていたが大変そうだった。よっちゃんには東京まで行く余裕はなかった。

知り合いのお母さんは、七〇歳ぐらいの時に、よっちゃんと同じ病気と判断されたそうだが、治療を断った。その結果、二年ぐらいで亡くなった。よっちゃんも発病してから病名が見つかるまで少なくとも一年はかかったし、幸いJ大病院という日本を代表する病院が近くにあってたから救われたが、不慣れた方だとわからぬままに死んでいく人も多いにちがいない。稀有な病気で普通の医者ではわからないからである。いろいろ考えるだけで、如何に、よっちゃんは運がよくて恵まれていたかがわかる。

連載「おつちよこチヨイぼけ」(32)

——昭和女、どっこい日記——

わが友、ふう子とシリア問題…の巻

ふう子は私の三十五年來の友だちだ。唯一無二の親友と呼べるのは、ふう子だけだ。長く生きてきたし、同じ仕事を続けていることもあって、友だちと呼べる人間が私にも何人かはいるのだが、ふう子以外は「類は友を呼んでしまった！」と思うようなのばかりだ。そう、私に似て、いかげんで、気ままで、「ちよつと！アタマ大丈夫かいな？」と聞きたくなるようなのばかりなんである。そういう友だちの一部を「お友だち大図鑑」で紹介したが、あれでも抑えて書いているし、ほかにもつとすこく変なものもいて、そのうちに紹介したいと思っているが、それらの友だちたちと「ふう子」は違う。しごく、真つ当。正しく、正義。そのために関西人として不可欠な「笑い」の要素が少ないことが、まあ難点と言えは難点なのだが、今回は「ふう子」である。

先日、昼ご飯を一緒に食べながら、シリアの難民問題のことを話題にしていた。ドイツが受け入れを決め、支援も表明していたが、国民の一部が反対デモをしている、という話。私は「正直なところ、受け入れに反対してデモをするドイツの人たちの気持ちもわかるよねえ。自分らの税金で、何でシリアの人を助けるのん？自分らの年金が減らされてまで…となるよね」と言ったら、ふう子はきっぱりと言ったのである。「それは違うやろ。着の身着のまま逃げて来た人とはとにか

く受け入れな。ほかに行くところがないねんから」。

そりや、そうだ。「だけど、ふう子、日本だったらどうよ？それでなくても私らの年金減らされてるのに」(私の場合、仕事をしていてかろうじて年収がある、という理由で一方的に金額を減らされるのがわかって、腹が立って、それつきりにしちやついているという経緯から、年金問題には屈折した怒りがつきまといっているのである。だって、仕事をしなかったら、生活できないから仕事をしているのに、仕事をしているから年金はストツプします、というのは、どういうこつちや？そもそも満額もらったって、雀の涙、生活なんかできない。だから、働いているのに。雀どころか蜂かこおろぎの涙ぐらいの金額に勝手に決められて納得できると思ってるのんか…。あ、いかん、今日は「ふう子」の話だった)。

ふう子は言った。「でもな、考えてもみてみ。私ら日本人だって、いつ難民になつて日本を離れなあかんことになるか、わからへんねんで」。ふう子によると日本で大きな震災があつて、福島原子力発電所の事故みたいなことがもつと大規模であつたら「日本に住んでいたら放射能で死ぬ、という事態も考えられるねんで」。

原子力発電所の事故だけでなく、大きな火山の噴火(マグマ性の噴火というらしい)があつたら、毒性のガスが噴出して、その被害規模は日本全土に及ぶ、ということもあるらしいデ、とふう子。NHKとかをよく見ているから、この手の話にはやたら詳しいのだ。

「命からがら、やっとお隣の国まで逃げて、『一歩たりとも、我が国にはいれません、帰りなさい』と言われたら、どんな気がする？ 辛いで。そりや、辛い。人道に、あつてはならないことだろう。せめて、飲み水と食糧ぐらひは支給していただきたい。ほかの国に助けを求めに行ける程度に元気を回復するまで泊めていただきたい、と言ったら贅沢だろうか。」

「ほらな、私がお隣の国にしてもいいことを日本もしなあかんねんて。ふう子は律儀に隣の国に「お」を付ける。」

「あなた、お隣の国って、どこよ？ 中国かいな？ 韓国？ まさかと思うけど北朝鮮？」と訊いたら、「選んでられへんやろうな」。私は出来れば、ハワイまで逃げて行きたい。グアムでもいい。お隣かどうかは知らないが（こういう私みたいな日本人独特の感情がいつまでたつても日韓・日中・日朝問題を解決させないのだとわかってるが…）。

ふう子は、「いま、生活に困っていないドイツが難民を受け入れるのは当然」と言い切る。「そういうてたかって、ドイツも自分の国を捨てて、お隣の国に助けを求めに行くことだってあるかもしれへんねんで」。ドイツの人は、いまはそれを考えてはいないと思うけど…。

ポートが転覆して、小さな男の子が溺れて死んだという痛ましいニュースが国際社会を動かし、メルケル首相がいち早く受け入れと支援を表明。その記事を新聞で読んだとき、私はメルケルさんって何と「オトコマエ」なんだろう、と思った。ちなみに、「オトコマエ」は私のな

かでは最上級の褒め言葉だ。顔や姿ではなく、やるのがかっこよくて（ああ、私にはできない…）と思うことをする人が「オトコマエ」。男・女も関係ない。

だが、それから半月もしないうちに、ドイツでシリア難民受け入れの反対デモが起きていたという報道。ドイツ国内の貧困層に属する人たちが異を唱えているらしい。反対派のなかには、メルケル首相を支持する女性政治家を刺したりまでしているらしい。そういう行為はオトコマエでないのかもしれないが、それでも反対する貧困層の気持ちはよくわかる。「私たちの暮らしは、どうなるのよ！」

「私たちの子供は？」「私たちの老後は？」。だけど、ふう子は「それは二の次の問題やろ。いま、溺れている人から助けやな」と言い切る。「じゃ、あなた、シリア難民、日本の受け入れOKやねんな？ 年金、もつと減るのは覚悟してるんやな？」と意地悪く訊いてみたら、「当たり前やん。シリアの人、ええで（笑）」。

シリア人の知り合いなんかないのに、何が「ええで」なんだか。

だが私はそんなわが友ふう子は「ええ」と思う。一方、「オトコマエ」と賛美したメルケル首相は国内の反対に屈したのか、トルコに行つてシリア難民の越境規制を要求したりしているらしい。そんな「オトコマエ」じゃないやん！ 本當に困っている人が戸口まで来ていたら、とりあえず中に入れるのが常識。そう、ふう子は言う。ふう子みたいな人ばつかりだったら戦争も紛争もなくなるのに。

(AO)

世界一周旅行記 (17)

タヒチは夢の楽園か

若山 哲郎

イースター島を二月二日に出て二週間程度十五日に船はタヒチに近づきました。タヒチは大西洋のほぼ真ん中に位置し日本から九五〇〇キロ、飛行機でも十二時間かかります。地図で見るとハワイの真南に位置しますが赤道を越えて行かねばならないためそれだけ遠いのです。飛行機の一時間は船で一日と聞きますがその通りですね。二週間も船の中、さぞ退屈と皆さん思われるでしょうが例によって毎日忙しい日々を送っております。午

前中はほぼ毎日英会話とトークイベント。午後は俳句の会やら音楽バンドの練習、夜は飲み会など休む暇もありません。友達グループも沢山できたため毎日入れ替わりで様々な話題のおしゃべりです。

さてタヒチの港はパペーテという町です。一応タヒチの首都となっていますが小さな港町です。今回のクルーズはモルディブやモリシヤスといった、有名なこのリゾートアイランドを訪ねましたが、わずか一日の滞在のためとてものんびりと過ごしている訳にはいきません。もったいないです。タヒチと言えは何を連想するでしょう。やはりリゾート、南の島、ダイビング、サーフィンなどでしょう。実際最近の新婚海外リゾート旅行の候補地にはタヒチとモルディブは必ず

上位にランクされています。絵画好きならゴーギャンかな。でもその前にもう少し基本的な事があります。ここは未だにフランス領、本国から遠く離れているのに、多くの太平洋諸島の国々が独立しているのにしづといですね。ハワイもアメリカ領ですが。あまり知られていませんがタヒチでは独立運動が今も続いています。公用語はフランス語で現地の言葉は禁止というひどい話。ガイドも嘆いていました。でそのフランスですが一九九〇年末までこの少し南のムルロア環礁で核実験をやりまくっていたことは有名ですね。その地域は未だに立入禁止、死の島になっています。核実験のモニョメントが港近くの公園にありましたが観光客は誰も気がついていませんでした。新婚のカップルなどはそんな興ざめた場所なんかは敢えて避けているでしょう。そこでなぜタヒチがリゾートアイランドになつているか。それはポリネシア人達に経済的恩恵をもたらす懐柔策としてあるというのが大きな理由といえは考えすぎでしょうか。一八八〇年にフランスがタヒチ王国を強制的に植民地にする前は自然豊かな島だったのでしよう。

十九世紀末、文字どおり世紀末のヨーロッパ文明社会に嫌気がさした日曜画家だったポール・ゴーギャンがこの島にきたのは素朴な島国の生活に逃避したからです。しかし、すでにここパペーテは文明化されており彼はより奥の村に

う廃業してしまいました。でもそこは南国の

植民地、政府高官のコロニアル風の建物、

お庭、草花なんかが多くありました。夜

には港近くの公園で中国人の屋台が並び

ました。そこで食べた中華料理が結構お

いしかったです。なんでタヒチに中国人

が住んでいるかと疑問におもつて調べて

みると。彼らは中国の客家人らしく、ア

メリカが南北戦争をしていた時代、綿花

の生産がアメリカ本国でできなくなった

のを見計らいこのタヒチで一儲けをたく

らみ移住してきたのだとか。この旅行記

の最初の寄港地である中国の廈門アモイ

でも客家のことは書きましたがすごいパ

ワーですね。

新婚さんや若者に人気のリゾート島で

もやはり様々な歴史や問題があるのです

ね。しかし表だけ見ているはそんなこと

は気がつきません。表タヒチは日本人に

は特に人気の島らしく、レストランには

必ずメニューに日本語がありました。そ

して奇怪な形の山がある島はタヒチ島の

すぐ近くのモーレア島。昔懐かしいミュ

ージカル映画「南太平洋」のバリハイと

いう神の山のモデルになったとか。ちな

みに島の海岸の砂は火山島のためかすべ

て黒色。映画ではイメージを変えるため

白砂を運んで来て入れ替えたとか。現地

の人に教えてもらいました。裏タヒチ、

あまりしやべると観光局からクレームが

来るかも。

大人の今昔物語 (16)

石川 吾郎

今回は京都を離れた鈴鹿の山での出来事。

若いエネルギーが横溢するさわやかな話

しです。新しい時代精神を感じることで

できる話し。教科書に出ない度は一／五。

鈴鹿の山中、見知らぬ堂で一夜を明かす話

(巻二十七ノ四十四)

今は昔、伊勢の国から近江の国に山越

えをする三人の男があった。位は低かつ

たが、三人ともなかなか豪胆で知恵も

あった。三人が通る鈴鹿の山中には昔か

らだれが言い出したか鬼が出ると云われ

る古いお堂があり、そこには人は決して

泊まらなかつた。深い山中にあり格好の

宿泊場所と思えたが、このような伝説が

あるので人はだれも近寄らなかつたのだ

つた。

時は夏。件の三人、山道を行くに、に

わかになりに暗くなり激しい夕立に逢つ

た。「すぐに止むだろう」と、厚く茂った

木立の下に立って雨宿りをしていたが、

なかなか降り止まない。日も暮れてくる。

そのうちの一人が「二丁、例のお堂に泊

まってやろうじゃないか」と言い出した。

他の二人は「あのお堂は昔から鬼が出る

つづうのに、どうしてわざわざそんな所

へ泊まろうっていうんだ。」

初めの男「こんなついでに、ほんとに

鬼に喰らわれるものなら喰らわれてやる

だけだ。どうせ死ぬ身だ。なにが怖いも

んかい。またキツネやタヌキのやつらが

人様を化かすのを、こんなふう言い始

めただけかもしれないぜ。」と云うと、他の

二人、日も暮れて辺りも暗くなつてきて

もいたので、しぶしぶ「そんならしやあ

ない。泊まってみるか」と、このお堂に

泊まることにした。

* * *

こんな所なので、三人とも寝ないでと

りとめなく話しをしていると、一人の男

「昼間通った山中に男の死体があった。

それをこれから行って取ってくる、つて

のはどうだい」と言う。それに対してこ

のお堂に泊まろうと言った男「そんなこ

とあ、朝飯前だ」と言うのを、他の二人

の男「そりやあ、今からでは無理だろう」

とけしかける。この男「よおしっ！それ

じゃあ、取ってくるッ」と、濡れるのが

イヤなので着物を脱いで、裸になつて雨

の中を走り出て行った。

雨は相変わらず降り続き、全くの闇夜

であつたが、もう一人の男、また同じよ

うに着物を脱いで裸になり、初めの男の

後を追つて出て行った。前の男よりひそ

かに脇道を先回りして、例の死人の場所

にきた。この男、その死人を取つて谷へ

投げ棄て、その場所に死骸のふりをして

横たわつた。

やがて、初めの男がやってきて、死人

たとき、この男、背負う男の肩をガブリと噛んだ。男「そんなに噛まんでおくれ、死人さんよ」と言い、そのまま背負って走り、例のお堂の前まできて、死体をそこに置き、「おーい、お前たちよ、ここに背負ってきたぜ」と、堂の中に入る。そのスキに、背負われてきた男は物陰に隠れてしまった。男が戻ってみると死体がない。「何と、死体が逃げてしまったぜ」と叫ぶ。その時、背負われていた男が物陰から現れ、大笑いして事情を話してやると、「とんでもない奴だ」と、二人してお堂の中に戻って行った。

この二人の男の豪胆さは、どちらも劣らないと言いながら、背負ってきた男が勝っているだろう。死人になる者はありもしようが、死人を背負ってもつてくる者はそうはいないだろうからだ。

* * *

ところでこの二人が出て行った後、このお堂では天井の格子の一マスごとに、さまざまな怪奇な顔などが出てきた。居残りの一人の男は、刀を抜いて一振りひらめかせたところ、一度にさつと笑いさざめいて消えていった。この男、それでも騒がなかった。この男の度胸も他の二人に劣らず座っているのだった。三人ともにたいした奴らだった。この三人、夜明けとともにこのお堂を出て、近江へと山を越えていったのだった。

お堂の現象を考えるに、その天井に顔を差し出してきたものは、キツネが化か

したのだろうと思われる。それを人々が鬼がいると言いつたのではなからうか。

* * *

この三人の男たちは、無事にこのお堂に一夜を過ごし、出て行った後でもこれといつてたたりなどはなかった。本当の鬼であったなら、その当座もその後にも無事でいられることはないだろう。このように言い伝えられているようだ。

《コメント》

この三人の若者の、無意味なエネルギーの爆発は青春特有のものでしよう。このような無鉄砲は分別盛りから見ると、非難の対象にはなっても、称賛には値し

美していません。これはとりもなおさず、語る者が既に青春をなくし、このような若者のエネルギーの爆発にまぶしさを感

B級サラリーマン渡世譚 (30)

明石 幸次郎

終業チャイムが鳴ったので、名刺と筆記具、ノートと引続き書と切符をカバンに入れて、帰る支度をした。周りの人は、黙々と頭を下げて仕事をしている人や、たばこを吸って一息ついてから、残業に取り掛かるうとする人もいた。女性の多くは、明石と同じ様に、いち早く帰る支度を始めた。明石は周りの人に挨拶をしてから、打ち合わせ室のドアをノックして、ドアを開けて、打ち合わせをしているM居さんとN川君に、帰りの挨拶をした。M居さんは「ご苦労さん。転勤初日から、大変やったなあ。明日は、早いで遅刻しない様になあ。これから鞆を買いに行くんか？鞆代を飲み代に代えてしまったら、アカンぞ！」と笑いながら挨拶に応じた。N川君も「明日は、新幹線の中でお会いしましょう。ご苦労様でした」と明石に頭を下げた。

挨拶を済ませ、エレベーターに乗らず、急いで階段を地下まで駆け下りた。地下の出口の前にある保安室の窓を覗き、顔見知りの保安員のY井さんに「元気ですか？」と声を掛けた。「あ、明石さん、久しぶりやなあ。堺で元気にやっつてんのん？今日は何や、本社で会議があったんかいな？」と恐そうな顔で笑いながら話しかけて来た。「本社に今日から転勤ですわ。又、休みの日に車を停めさせてね。宜しく」と応えた。「何処に転勤や？又、資材部に戻って来たんか？」明石は「四階の輸出部ですわ！」と応えると「あんな

た偉いなあ。英語喋れるんやなあ？」と返してきたので、長くなるやバイと思

い、「まあ、べらべらまでは、いきまへんが、へらへら位は何とか？又、覗きに

来ます。今からこれですねん」と親指と人差し指で丸くして、それを口に当てて応

じると、Y井さんも急いでいるのを察し、

「そうか、初日から飲み会か？忙しいな

あ」と話を終えてくれたので、1階に通

じる階段を駆け上り外に出た。

会社を出ると、何故か解放された気分

になるのを感じながら、二年ぶりに、通

い慣れた猥雑な通勤路を速足で難波に向

って歩いて行った。すぐに高島屋着き、

華やいだ店内に入って行き、横にある案

内で鞆売り場を尋ねた。「五階にあります

ので、右側のエレベーターでお上がり下

さい」と綺麗に化粧をした、帽子の似合

う案内嬢が丁寧に答えてくれた。六時に

同期のM井とこのデパートの正面辺りで

待ち合わせをしていた。時計を見ると、

それまで三〇分程時間があるので、ゆっ

たりとした気分でエレベーターに乗り五階

まで上がって行った。鞆売り場は直ぐに

分かったもので、適当な物がないかと、物

色し始めた。当時は今と違って、サラリ

ーマンが鞆を持って会社に通勤すると言

うスタイルは一般的でなかった。その為

か、鞆の種類も少なく、あれこれ見比べ

て、選ぶのに迷う事は無かった。輸出部

員の大半が持っているアタッシュケースだ

けは、何となく気沙汰らしくて、B級サ

ラリーマンの自分には似合わないと思

覚？していたので、壁際に陳列している

アタッシュケースには無視した。適当な

鞆を手にとると、直ぐに暇そうにしていた女店員がさつと寄ってきて、「どういった鞆をお探しですか？」と声を掛けて来た。気が小さい明石は、特に若い女店員に声を掛けられ、あれこれ奨められると、何故か、買わないといけない様な気分に分らされ、気に要らない物でも、気に入った気分になってしまい、エイヤと買ってしまったことが多かった。デパートで自分が選んで買った品物を家に帰り、家族に見せて、褒められたためしは、まずはない。何でこんなセンスのない、高い物を買ったの！と言われるのが常であった。今回もそれが頭をよぎったが、心齋橋まで足を延ばして専門店を選ぶ時間も気力もないので、色とサイズと予算を女店員に伝えて選んでもらうことにした。女店員は、ケースと棚から適当に手揚げ鞆を三回程選んで、明石の前に並べて、一つ一つの特徴を説明し始めて、「お客さんには、これがお似合いですよ」とチラッと明石が持っている鞆を見て、手垢が付いても目立たない色の革製の鞆を奨めた。値札を見ると、予算をオーバーするが、転勤の初日の記念にという理屈をつけ、自分を納得させてから、女店員が奨める鞆に決めた。レジで支払いを済ませてから、今度はエスカレーターで、店内を見渡しながらか、一階まで下りて行った。店内は華やかで明るく、多くの若い女性とおばさん連れで賑わっていたが、明石はデパートに来ると何となく違和感を感じ、用を済ませるとそそくさと退散するのが常であった。今日も目的が達せられたので、鞆の入った紙袋を使い古した手

垢のついた鞆を小脇に抱えて正面の出口を出て外でM井が来るのを待った。この辺りは、待ち合わせの指定場所になっているのか、大勢の待ち合わせの人がいた。六時を一〇分程過ぎた頃に、慌ててM井が速足で近づいて来た。「すまん、すまんのう、待たせてしもうて。チャイムが鳴って、直ぐには出て来れんけんのう、仕事をするふりしながらのう、タイミングを計って、出て来たもんで、遅れてしもうたわ。はっはっは」と笑いながら、一〇分遅れた言い訳をした。明石は、M井が言い訳する職場の状況が手に取るように分かる気がしたが、「今日する仕事がなく、終業のチャイムが鳴ったら、会社を出たらエエやないか？何で出られないんや？」まあ、人事部と言うところは、真面目くさった顔をして、終業時間が過ぎて、一生懸命に仕事をやっている振りをしないといかんような雰囲気がある職場でのう。ワシは疲れてしもうたわ。ここで、ぼやくのも何やから、どこか行こうかのう」と相変わらず、広島の故郷の島の匂いを感じさせる話し方は、新入社員の七年前と少しも変わっていない。「それなら、久しぶりに歌舞伎座の裏にある、お姉ちゃんが一人でやっているカウンターだけの店はどうや？まだつぶれてないと思うわ」と資材部の時に遊び人の先輩によく連れてきてもらった店を思い出して提案した。M井は「わしや、美人のお姉ちゃんがいたらどこでもエエけん。そこがエエぞ」とすぐに賛成してくれたので、店の場所を思い出しながら、二人で歩いて行った。

言葉が熟するということ

大江 雉鬼

いきなりだが、李白の「友人を送る」から。

青山は北郭に横たわり

白水は東城を遶る

此の地一たび別れを為せば

孤蓬万里を征く

浮雲は遊子の意

落日は故人の情

手を揮りて茲より去れば

蕭蕭として班馬 鳴く

李白詩のなかでは比較的有名な部類の作品、というかもっとも有名な作品になるかも知れない。近年は漢詩を口ずさんで言葉を飾る風潮は廃れ気味なので接する機会もいよいよ少なくなっているようだが、一時代昔に遡れば一般教養にカウントされていた一篇である。今回、この詩を取りあげたのは、言葉が社会に熟する、つまり、とある言葉が普遍的な表現として価値を持つに至るとは、どういうことかについて考えてみようと思っただけである。

たとえば「孤蓬」という言葉。蓬は和訓ではヨモギになるのだが、私たちが普通に言うところのヨモギと中国語の蓬とは一致しない。李白詩に出てくる蓬はアザミ科の植物で、地上に出ている茎の部

分がボールのように丸くなり、風をうけると根と分かれて転がっていくらしい。そこから居所を定めず放浪する人のイメージが重ねられる。日本語でイメージの近いところを探せば、水に漂う浮き草だるうか。水面をあてどもなく彷徨う浮き草、荒涼とした大地を風まかせに転がる蓬、これらはおおよそ似たイメージで捉えられてきた。

ここで注目したいのは、分析的に説明するとなると、実態がよく分からない植物「蓬」でさえ李白詩に出てくる孤蓬という形で十分にイメージ化される点である。それだけ李白詩「友人を送る」が人口に膾炙していたわけだが、逆にいえば出典が広く受け入れられたなら、それが認識のベースとなり、用いられている言葉は曖昧な理解のままでも普遍性を持ち得るということである。現在、普通に用いられている四字熟語なるもののなかにも、これに類した形で広まったものも少なくない。とある作品が社会財産として共有され、そこに用いられる言葉が広く知られるようになり、世に言う教養と見做される語彙群を作る、そして社会の価値観が推移して出典の作品が占めていた地位を失った後も教養となっていた言葉のいくつかは生きながらえる……といったところである。たとえば「一刻千金」や「温故知新」などがそれで、中学生の試験問題にも出題されそうなこれらの言葉については、蘇軾詩「春夜」や論語・為政篇などの出典は知らなくても意味だけは十分に理解されている。

李白詩「友人を送る」に戻ろう。先に触れたように「孤蓬」という言葉は浮き草に似たイメージで捉えられているのだが、改めて熟語という観点から眺めてみる。とりわけお約束の四字熟語に絞るとどうなるだろう。さすがにアンチヨコ本でもお馴染みというレベルの表現はなさそうだが、「友人を送る」が有名な詩篇であることに疑いを差し挟まないのであれば、「孤蓬万里」「浮雲落日」あたりは熟語化させても通じそう。自らの境遇を「孤蓬万里の運命」とか言うのは孤高のヒーローになったようなカッコよさがあるし、送別会などの席上で「本日の浮雲落日の思い（＝不安を抱いて旅立つ者と別れを惜しみながら見送る者の心情）は忘れません」とか挨拶するとわずかばかり箔も付きそう。

もつとも、これも先に少し触れたのだが、現在では漢詩の地位は、かつてに比べると極端に下落している。社会全体が均一な価値観をもっていた時代なら、漢詩のみならず、古今和歌集や源氏物語といった古典文学は相応の輝きも帯びていた。しかし近年ではそれらを持ち出そうものなら煙たがられることさえある。価値観が多様化した結果と言えどもつともらしいが、義務教育のなかでの強制もたらした悪弊と見ることもできる。教本のノウハウに則して伝達されるだけでは言葉の味わいなど伝わらないし、むしろ押しつけがましさが記憶に刻みこまれる。後に残るは生理的な拒否反応だけというオチである。

こうした状況を見ると、かつて漢詩や古典文学が占有していた言葉の典拠という特等席は、いまや他の媒体に譲り渡されつつようだ。映画やテレビドラマ、あるいはマンガやアニメといったビジュアル重視の作品群である。映画はもはや斜陽産業だし、テレビドラマは「テレビ離れが云々」との議論があるから外してもよさそうだが、大雑把にビジュアル性の強い媒体ということで、映画・テレビドラマ・マンガ・アニメとしておく。李白詩や源氏物語と並べる時、これらが無条件に低級視する人がいるとすれば、そうした態度こそが硬直した発想というべきだろう。実のところ、漢詩や古典文学の価値通減を招いたのもそうした固定観念であると考えられている。

それはさておき、李白詩であれ源氏物語であれ、そもそもところは作品が社会に広く受け入れられたからこそ言葉は熟していった。それならガンダムやエヴァンゲリオンの登場人物が口にしたセリフが同等の扱いを受けてもおかしくはない。シャア・アズナブルに熱狂した世代はすでに中年の域に達しているし、碓氷シンジがこぼす愚痴の数々に共感した連中もすでに人の親である。そうした人々にしてみれば、作中のセリフが絶妙の使い方だで転用された場面に出会うと、思わずクスツとしてしまいうに違いない。そうして、そんなシチュエーションが何度もくり返されるのなら、それは言葉が社会に熟していく現場に立ち会っていることになる。

冗舌をあれこれ重ねてきたが、最後にセリフ転用の具体例は一つくらい挙げておくべきかも知れない。たとえば友人が何かの作業に没頭していると。傍目からも見習うべき（あるいは呆れるくらい）集中力なのだが、そこに傾注する努力の方向を間違えていたとすれば、忠告の一つぐらひは必要になるはず。しかし、熱が入りすぎていいるせいか、周りが全く見えなくなっているとすればどうだろう。せつかくの忠告も耳を傾けてもらえないのではないか。そんな時には虚ろな眼差しと優しい声色でこう声かけてあげるのが正しい。「少し……頭冷やそうか」と。これが某アニメ作品でのセリフであることが解っていないと平凡な会話に聞こえてしまうが、ストーリーと重ね合わせると決定的な最後通牒であることがわかる。もし両者の間で情報の共有がなされていたなら、実力行使五秒前の緊迫感さえ伝わるのだが、ここでそれを詳しく説明するのもこれまた冗舌というものの。気になって仕方ないという方は、少し、頭冷やそうか”をネット検索していただきたい。ピンポイントの解説と出合えるはずである。

編集後記

先日、須磨浦公園から宝塚まで六甲山を五十六キロ、十三時間半で歩いてきました。三月に続いて二回目ですが、今回はわりと楽に早く歩きました。

毎日、朝夕歩いている為か筋肉が強くなってきたようです。もうすぐ退院して三年です。不思議にもどんどん若くなっていく感じ。やはり人間は歩くようになっていきます。

となりのドクターも最近、ポンポン山に度々登っておられます。筋肉付けない膝や腰の痛みは治らないと。一番の薬は歩く事です。

私の尊敬する戸田巽さんは、八十八歳で大阪・天保山から富士山の頂上まで毎日歩いて登られました。私も、身体を鍛えて七〇歳になれば挑戦したいです。

戸田さんは、幾度か病気になったり、奥さんの自宅介護に明け暮れながらも歩き続けられました。また、歩きながら見つけた地方の銘酒を買って担いで来られ頭が下がる想いがしました。

私も、おかげで目や頭も大分すっきりしてきました。やはり持続は力なり。毎日、十四キロ、二万歩を歩き続けたら健康になります。ストレスも減ります。お試しください。（嘉）



元気なのかしら

私はよく出会いがしらに「元気やネエ」と声をかけられる。

なにナニ、元気そうに見えるだけやで、なんのその、あちこち故障がおきている。

立ち上がり、歩き出しが大変、あとからお先へ、ひとり、ふたり、よき姿勢で抜かれてしまう。これも年のせいか、とつぶやく。最近、耳までが変だと気づく。

「何回もよんだのに」と背中をたたかれる。

この位はよいのくち
「芝居を見て、セリフが聞きとれなくなったこと」

「もう劇場へゆくのはやめと」と思いながらも、チケットを買ってしまふ。でもいいか脳細胞を再生させるために医学の力も必要だけでも自分も頑張ろう。

長寿は、めでたい、なんて言われて我が身を省みることなく、時代の流れにそわない古いことを押し付け、新しいものはすべてを憎み「老害」といわれて孤立する我が身を振り返って笑うのである。

くちべた

お礼下手な、わかっていながら、

なかなか、お礼の言葉が出ない。

ごちそうしたお礼を半年後に言われて、何のお礼かしらと思つたと友はなげく。

それにしても半年もたつてからはネ。言い訳が振るつていいるのだから腹も立つ「今度出会つた時に直接言おうと思つていた」逆にお祝いの返礼がすぐ届くと、これも何んだか複雑な気持ち、お礼はむずかしい。浅草生まれの女優で随筆家でも知られた故沢村貞子さんの「わたしの茶の間、昨日のあいさつ」というのを見ると。

心づくしの料理を頂いたり、いろんな催事に共にしたら、翌日のお礼が大事だと強調しておられる。

確かに、もてなしを受けたら、その場でお礼いうけれど、翌日にはもう一度「昨日はありがとうございました」とても楽しかったです」と。その「昨日のあいさつ」が人間関係の潤滑油になるという。わかっているもなかなか実行できない。こんな事書くのさえ私もはばかれる。

小説「青い雪を見て」

十月三日付けで終結で、次回からはという記事を見て、日々新聞を心待ちに朝をむかえ、社会面に連載さ

れている「青い雪」を読むのが、私のほんのひとときでした。

六十五年前に農家の七人の長男の嫁として、義父母の生活に只ひたすら働き何度か涙し、実家へ帰りぐちの山。罪のない子どもの顔を見ると、ふんざりもつかず、里の母に「辛抱しな。縁あつて嫁いだのや、こんな山深い田舎に帰つて『出もどり』と指をさされるよりは、見知らぬ場所で泣き、頑張るんや。辛抱した木には、きつと金になる時がくる。『負けて勝ちとるんや』と背中を押され、ふん止まり。

現在は、すっかり私の周辺も変化してしまつた。

新聞の小説、主人公の美紀子さんの姿を遠き昔に重ねて、苦しかった道のりは、いつか心の糧となり、強く生きてきた自分自身をいじめないで、大事にして、これからの九〇才、九十一才の道を歩んでゆきたい。

としよりには不向き

百円や二百円の買い物のためにカードを持ち歩き、そのたんびに店頭で示さなければならぬ。サイフの中身は、札はおろか小銭とレシート、カードでいっぱい。

「カードを見せてください」といわ

れるたびに、全部並べて「どれですか」私も意地悪をする。

カード不用でさつさとすませる店で買うようにする。

出来ない自分が情けなくて、便利になつたことよりも、対応できないことは、高齢化社会には向いていない。

俳句

土田 裕

東の間の北京秋天軍靴鳴る

熟年のリヌツクは軽し

紅葉晴れ

くろがねの大地を信じ

大根蒔く

秋蝶のもつれたるまま

吹かれぬし

夜なべせし

昭和の母を恋ふるかな